

〔論 文〕

会田家文書『大切御書附』にみる 江戸城本丸御殿の室内意匠について

小 粥 祐 子

The Interior Decorative Motifs in Honmaru Residence, Edo Castle, Recorded in
Aida Family's Document *Taisetū-onkakituke*

OGAI Masako

This paper examines a document *Taisetū-onkakituke* owned by Saitama Prefectural Archives (Aida-ke monjo 1108, hereafter referred to as *Kakituke*), and discusses a new fact revealed through a comparative study of the contemporary historical accounts on interior decorative motifs on sliding doors, walls or ceilings in the Honmaru Residence, Edo Castle. *Kakituke* in itself gives details of the motifs and other interior designs of the castle recorded on 18 September, 1781 (Tenmei gannen).

The detailed records are of the motifs of the paintings or styles of fanlight carvings (*Horimono-ranma*) and nail covers (*Kugi-kakusi*) in the rooms and passages located between *Goza-no-ma* (for Shogun's official duties) and *Ôhiroma* (reception hall) including *Kurosyoin*, *Matudamari*, *Take-no-rôka*, *Nami-no-ma*, *Sirosyoin*, *Kiku-no-ma*, *Fuyô-no-ma*, *Gan-no-ma*, *Take-no-ma*, *Yamabuki-no-ma*, *Hame-no-ma*, *Yanagi-no-ma*, *Sakura-no-ma*, *Matu-no-ôroka*, *Kaminoma-onheya*, *Tenzyô-no-ma* and *Tora-no-ma*.

When comparing the descriptions concerning the motifs with other historical accounts, the details in *Kakituke* corresponded with those of the other accounts except for the design on the ceiling in *Kurosyoin*. This suffices the credibility of this document. *Kakituke* tells that the motif of nail covers in the *Ôhiroma* is 'peonies wrapped with nosi' (*Hana-nosi*). Up to now we could only know about the outline of the oval nail covers in this room through an illustration in *Tokugawa-seiseiroku* (1889).

Key words: Honmaru residence, Edo Castle (江戸城本丸御殿), interior decorative motif (室内意匠), nail cover (釘隠), Tenmei gannen (天明元年)

1. はじめに

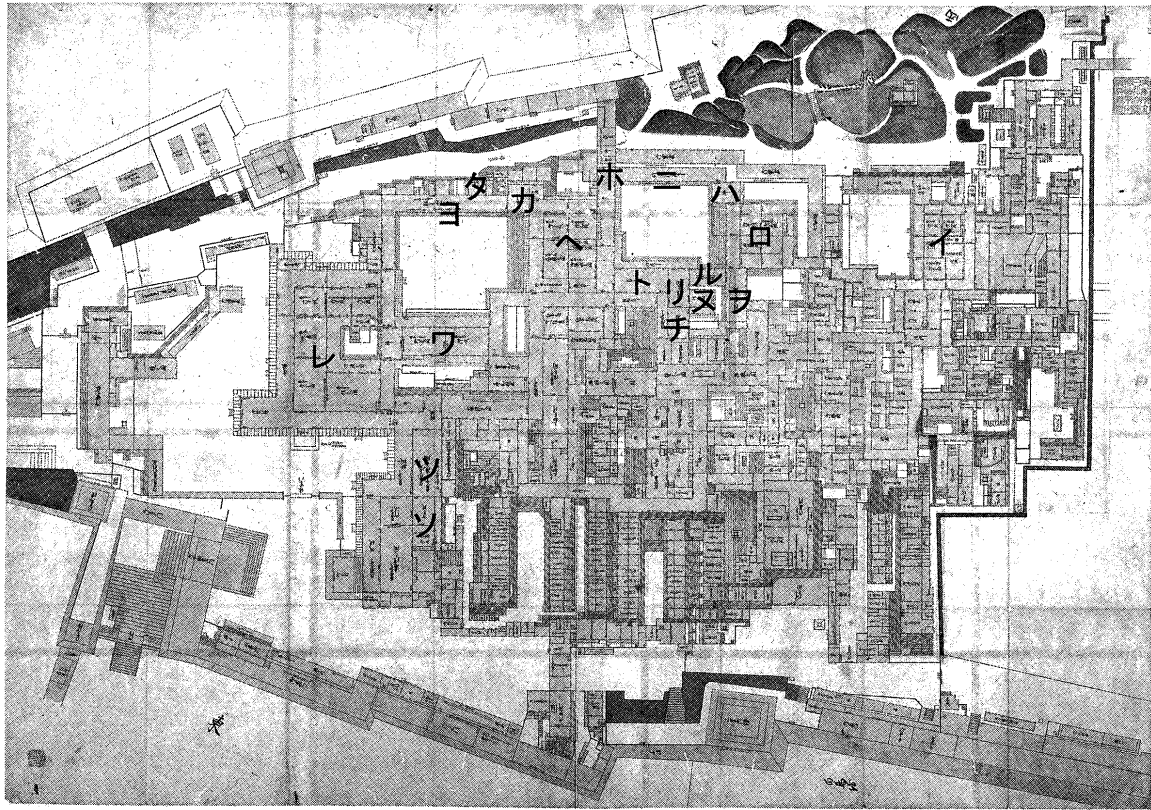
江戸城本丸御殿は、幕府の政庁・儀式を行う部分「表」^{おもて}、将軍の執務室・住居部分「中奥」^{なかおく}、将軍の家族の住居部分「大奥」^{おおおく}の3領域からなっていた。江戸城本丸御殿は、江戸時代を通じて度々再建されているが、寛永16年(1639)の火災以降は4回再建され、いずれも御殿焼失によるものであった。(表1) また、本丸御殿は、再建以外に将軍の代替わり

表1 江戸城本丸御殿の再建

回数	造営度 ¹	竣工年
1	寛永度	寛永17年(1640)
2	万治度	万治2年(1659)
3	弘化度	弘化2年(1845)
4	万延度	万延元年(1860)

などにも修理・改造されている。

江戸城本丸御殿を初めとする江戸時代の武家住宅



凡例	イ: 御座之間	ヘ: 白書院	ル: 山吹之間	タ: 上之間御部屋
	ロ: 黒書院	ト: 菊之間	ヲ: 羽目之間	レ: 大広間
	ハ: 松溜	チ: 芙蓉之間	ワ: 柳之間	ソ: 殿上之間
	ニ: 竹之廊下	リ: 雁之間	カ: 桜之間	ツ: 虎之間
	ホ: 波之間	ヌ: 竹之間	ヨ: 松之大廊下	

図1 『御本丸表方惣絵図』(東京都立中央図書館特別文庫室蔵 請求番号 616-37)

は、壁・天井・建具・欄間・金物などに様々な意匠がほどこされていた。壁・天井・建具には絵を描いた紙や文様を印刷した紙(唐紙)を貼り、杉戸には直接絵を描いた(杉戸絵)。これらを総称して障壁面と呼ぶ。欄間には彫刻(彫物欄間)を施し、釘隠や建具の引き手に細工を施した金物(鈔金物)をつけた。これら意匠は、単に装飾という意味を持つだけでなく御殿内で儀式を行う人々・働く人々にとって目印となった。

江戸城本丸御殿の室内意匠については、いくつかの先行研究があるが²、いずれの研究においても本丸御殿内の全ての室内意匠が判明しているわけではない。

本稿では、『大切御書附』(埼玉県立文書館蔵 会田家文書 1108)³(以下、『書附』と略記する)を取り上げる。『書附』の筆者は現在のところ不明である。『書

附』には、御座之間から表に向かって、黒書院、松溜、御成廊下(竹之廊下)、波之間、白書院、菊之間、芙蓉之間、雁之間、竹之間、山吹之間、羽目之間、柳之間、桜之間、松之大廊下、上之間御部屋、大広間、殿上之間、虎之間の19を列記している。(図1)また、芙蓉之間、雁之間、山吹之間を除く16については障壁面に描かれた題材が、大広間については釘隠・彫物欄間の題材も記されており、菊之間、芙蓉之間には、入室者についての注意が記されている。

そこで本稿は、『書附』に記載されている室内意匠の題材と、すでに明らかにされている『書附』と同時期の本丸御殿の室内意匠に関する資料とを照らし合わせ、『書附』の信憑性を検討するとともに、この『書附』によって新たに判明した部分を明らかにすることを目的とする。

2. 『書附』の書誌について

『書附』は、武州足立郡（現、埼玉県）の名主会田家旧蔵文書である。江戸時代、会田家は幕府の鳥見役であった⁴。武州足立郡には御三家や諸藩の鷹場があった。会田家は、紀州藩主が行った1週間から10日の泊まり狩の際には本陣の1つとなった。会田家文書は、鳥見役や猟場の管理に関する文書、本陣に関する文書がほとんどであるが、江戸城御殿内の儀式や出来事に関する文書がわずかに含まれていて、『書附』はその1つである。『書附』がどのような経緯で会田家に伝わったのかは不明である。

『書附』には年記がないが、『書附』の中の記述から年代を特定することができる。『書附』によると、芙蓉之間入口の杉戸に書附があり、表2に示したように宝暦8年（1758）から寛政元年（1789）の間に老中・若年寄の役職についた「松平右京大夫、松平周防守、田沼主殿頭、久世大和守、水野出羽守、松平伊賀守、酒井石見守、鳥居丹波守、加納遠江守、酒井飛驒守、太田備後守」の名前が書かれている。これらの人々が、『書附』が記された当時の老中・若年寄に就いていたとすれば、在任期間が重なる時期から、この芙蓉之間杉戸に貼られた書附の年代を特定することができる⁵。在任期間を見ると、天明

元年（1781）9月18日に、水野（忠友）出羽守が老中になり、同じ日に鳥居（中孝）丹波守が若年寄を辞している。『書附』の記述は一連のものであることから、芙蓉之間の杉戸に貼られた書附の年代は、『書附』が書かれた年代を示し、『書附』は天明元年（1781）9月18日に本丸御殿室内意匠を書き留めた文書であるということになる。天明元年（1781）の本丸御殿は、万治度本丸御殿⁶に当たる。

3. 『書附』と同時期の室内意匠に関する資料について

先述のように、『書附』の記述は、天明元年（1781）の本丸御殿のもので万治度本丸御殿である。そこで、万治度本丸御殿の室内意匠について記された主な資料を次に挙げる。

- 「御本丸表向御座敷繪様 但 弘化度炎上以前筆者」⁷
（以下、「御座敷繪様」と略記する）
- 「御本丸御座敷御廊下繪様之覚」⁸
（以下、「繪様之覚」と略記する）
- 『御本丸表方惣繪図』⁹
（以下、『万治度平面図』と略記する）
- 「御本丸表向御座敷繪図」¹⁰
（以下、「座敷繪図」と略記する）

表2 『書附』に見られる老中・若年寄の在任期間

役職	氏名	役職在任期間	
		自	至
老中	松平(輝高)右京大夫	宝暦8(1758) 10. 18.	天明元(1781) 9. 26.
	松平(康福)周防守	宝暦12(1762) 12. 9.	天明8(1788) 4. 3.
	田沼(意次)主殿頭	明和6(1769) 8. 18.	天明6(1786) 8. 27.
	久世(広明)大和守	天明元(1781)閏5. 11.	天明5(1785)正. 24.
	水野(忠友)出羽守	天明元(1781) 9. 18.	天明8(1788) 3. 28.
若年寄	松平(忠順)伊賀守	安永4(1775) 8. 26.	天明3(1783) 2. 8.
	酒井(忠休)石見守	宝暦11(1761) 8. 15.	天明7(1787) 4. 10.
	鳥居(中孝)丹波守	宝暦12(1762) 12. 9.	天明元(1781) 9. 18.
	加納(久堅)遠江守	明和4(1767) 10. 26.	天明6(1786) 7. 24.
	酒井(忠香)飛驒守	明和2(1765) 8. 21.	天明8(1788) 3. 19.
	太田(資愛)備後守	天明元(1781)閏5. 11.	寛政元(1789) 4. 11.

註1 氏名欄（ ）内は筆者による加筆、（ ）以外は『書附』による。

註2 在任期間欄は、「幕府諸職就任者一覧」、竹内誠 編『徳川幕府事典』、東京堂出版、2003、pp. 431-529による。

万治度本丸御殿は、万治2年(1659)に竣工してから天保15年(1844)に焼失するまで、約185年間建っていた御殿である。万治度本丸御殿の室内意匠については、その後に建てられた幕末期の弘化度・万延度本丸御殿に比べて不明な部分が多い。

4. 『書附』に記されている室内意匠

本項では、『書附』に記されている本丸御殿の室内意匠を示し、万治度本丸御殿の障壁画の画題が書かれた資料と比較する。(表3)

『書附』に記されている障壁画等の題材のうち、竹之廊下(北側壁)、波之間、白書院、菊之間、竹之間、柳之間(杉戸)、松之大廊下、大広間(天井、上段、首執見の所、小壁、杉戸)、殿上之間、虎之間については、『書附』と他資料と内容が一致する。したがって、『書附』は信憑性が高いといえる。よって、他資料と比較することが出来ない御座之間、松溜、竹之廊下(天井、南側壁)、羽目之間、柳之間(床)、桜之間、上之間御部屋、大広間(二之間・車寄せ・欄間、釘隠)の記述についても信憑性が高いと考えてよい。これら他資料にはない意匠の詳細については、『書附』によって初めて知りうるものであり、この意味において『書附』はきわめて貴重な史料であるといえる。

また、『書附』によって6箇所^マの杉戸絵の題材が分かるが、このうち3箇所については題材名に若干の省略が見られる。

白書院(出口)の杉戸は、『書附』に裏は「朝かほ」、表は「じやかう(麝香)猫」とあるが、「座敷絵図」・「御座敷絵様」によると、裏(北側)は「萩垣朝顔」、表(南側)は「葵麝香」とある。『書附』には、裏の萩垣、表の葵が記されていない。柳之間御溜(西側)の杉戸絵の画題については、『書附』に「み^マつく」とのみ記されている。「御座敷絵様」によると、杉戸の東表に「狛^マみ^マつく」とある。殿上之間(脇)の杉戸絵の画題について、『書附』には「笹^マしやか猫」と記されている。「しやか猫」とは、麝香猫のことであろう。『書附』と「座敷絵図」・「御座敷絵様」に記されている杉戸絵の画題を比較すると、杉戸絵の西側は麝香猫の他に、『書附』

では「笹」、「座敷絵図」・「御座敷絵様」では「葵」と記されている。

以上のことから、『書附』に記された杉戸絵の画題は、障壁画に描かれた物の特徴を記していることが判明する。

『書附』と他資料とで異同がみられる黒書院の天井は、『書附』によると「村砂子」、「絵様之覚」では「山水色々墨絵之押絵」とある。「砂子」は障壁画を装飾するために使われる技法で、画題ではない。おそらく『書附』の筆者は、黒書院の天井装飾の特徴を「村砂子」と記したのであろう。

5. 『書附』に記されている釘隠について

釘隠とは、長押しに打った釘の頭を隠すために施された装飾具で、書院造や江戸時代の武家住宅では六葉形釘隠が多く用いられていた¹¹。

江戸城本丸御殿については、大奥の一部の部屋について釘隠や引き手に関する史料が残っているが¹²、表・中奥については史料がなくわからなかった。また、『徳川盛世録』(1899)の挿絵には楕円形をした釘隠の外形がみえるが、この文献は明治時代に入って書かれたものであるため信憑性に欠けていた。

『書附』の大広間に関する記述のなかには、「御釘かくし不残、牡丹つつみ花御なけし」とある。「つつみ花」とは、花を包んでいる状態を表している。このモチーフが施された釘隠を花熨斗形釘隠という。熨斗に包まれた花は牡丹である。

花熨斗形釘隠は横に長い楕円形で、二条城、大阪城でも花熨斗形の釘隠が用いられていた。

こうしたことから、『書附』の記述によって、万治度本丸御殿大広間の釘隠は、牡丹を熨斗で包んだ花熨斗形のモチーフであったことが判明した。



図2 花熨斗形釘隠

二条城二の丸御殿花熨斗形釘隠の写真を筆者がトレースした。

表3 『書附』および他史料に記されている本丸御殿の室内意匠

建物名	室名	部分	『書附』	「絵様之覚」	『万治度平面図』	「座敷絵図」	「御座敷絵様」	
			画題	画題	画題	画題	画題	
御座之間		張付	金					
		天井	菊唐草	—	—	—	—	
		床	松ニきち	—	—	—	—	
		襖	梅ニ小鳥	—	—	—	—	
		杉戸	水ニさい	—	—	—	—	
黒書院	上・下段之間・西湖之間	天井	村砂子	山水色々墨絵之押絵				
松溜		床	雪松水	—	—	—	—	
		(天井)	黒絵村砂子	—	—	—	—	
		(北側) (壁/小壁)	竹ニ雀	—	—	—	—	
		末之方(南側) (壁/小壁)	霞ニ竹	—	—	—	—	
波之間		(壁)	岩波ニ千鳥かもめ	波ニ白鷗	—	—	岩波かもめ	
		小壁	—	四季山	—	—	—	
白書院		(壁/小壁)	帝鑑	帝鑑	—	—	帝鑑	
		天井	かう天井唐草	—	—	—	—	
		上段 天井	—	錦紋	—	—	—	
		ニ・三之間 天井	—	唐草	—	—	—	
		出口 杉戸	裏: 朝かほ	—	—	(杉戸)	北: 萩垣朝顔	北裏: 萩垣朝顔
			表: じゃかう猫	—	—	—	南: 葵麝香	南表: 葵麝香
御連歌の間	床	松ニ梅	梅と松	—	—	—		
菊之間	(壁/小壁)	籬ニ菊	籬菊	—	—	籬菊		
竹之間		(壁/小壁)	きり竹	竹ニ鳥	—	—	竹ニ雀	
		床	竹	—	—	—	—	
羽目之間	床	もみち	—	—	—	—		
柳之間		(壁/小壁)	柳	雪竹/四季山	—	—	—	
		床	雪柳	—	—	—	—	
		御溜(西側) 杉戸	みいつく	—	—	東: 白猿	東: 猿	東表: 猿ニみいつく
—	—		—	西: 白牡丹	西: 芍薬	西: 菊		
桜之間		床	桜	—	—	—	—	
		—	—	桜四季山	—	—	—	
松之大廊下	(壁/小壁)	岩波ニ松ニ千鳥数百	浜松之図	—	—	浜松千鳥		
上之間御部屋	(壁/小壁)	秋草	—	—	—	秋野		
大広間	上段	天井	てっせん桐つた花	桐之葉唐草	—	—	—	
		—	—	錦紋鳳凰	—	—	—	
	床	松ニ鶴	—	—	—	—	—	
		松ニ鶴	松鶴雪ニ柳小鳥	—	—	—	松鶴	
	外通り 二之間	小壁	紅白ぼたん	牡丹若松	—	—	—	
		襖	大木曾根の松	—	—	—	—	
	御帳台 車寄せ	(壁/小壁)	水草ニさゝ	—	—	—	—	
		(壁/小壁)	獅子	—	—	—	—	
	入口 杉戸	—	—	—	(杉戸)	北: 枯木啄木	北: 枯木啄木	
		西王母	—	—	—	南: 西王母	南: 西王母	
	首執見の所 (壁/小壁)	獅子	—	—	—	—	獅子	
	下段・二之間境 欄間	桐ニ鳳凰	—	—	—	—	—	
	二之間・三之間境	唐松にきんげい, ぼたん	—	—	—	—	—	
	三之間・四之間境	菊水	—	—	—	—	—	
釘隠	牡丹つつみ花	—	—	—	—	—		
殿上之間		杉戸	—	—	東: 白沢	東: 白澤	東: はくたく	
		—	—	—	西: (杉戸)	西: 葵麝香	西: 葵麝香	
虎之間		(壁/小壁)	竹ニ虎	竹ニ虎	—	—	—	
		杉戸	—	—	—	北: 廉紅	北: 紅葉鹿	北: 紅葉鹿
			浪ニさい	—	—	南: 波犀	南: 波犀	南: 波犀

凡例1 ■太字 共通するもの

凡例2 太枠 異同が見られるもの

註1 「絵様之覚」: 「御本丸御座敷御廊下絵様之覚」

註2 『万治度平面図』: 『御本丸表方惣絵図』

註3 「座敷絵図」: 「御本丸表向御座敷絵図」

註4 「御座敷絵様」: 「御本丸表向御座敷絵様 但 弘化度炎上以前筆者」

註5 ()内は筆者による。

6. おわりに

江戸城は約 265 年続いた徳川幕府を象徴する城であるために、壮大な天守閣、絢爛豪華な大広間、華麗な大奥などの煌びやかで華やかなイメージが先行する。江戸城本丸御殿を復元しようとするとき、表・中奥部分の建物の構造については、東京国立博物館、東京都立中央図書館などに保管されている幕末期の本丸御殿の図面があるのでほぼ復元することが可能であるが、室内意匠となると復元できる部屋はごく一部に限られる。これは、障壁画の画題・彫物欄間の図案名などが分かっているにもかかわらず実際の意匠がどうであったのか、まだ分からない部分が多いためである。大奥について言えば、平面図とわずかな屋根伏図しかわからない。室内意匠についても一部の部屋に限られる。

『書附』と同時期の他資料とを比較した結果、『書附』と他資料と記述はほぼ一致した。このことから、『書附』は信憑性が高い史料と言える。また、『書附』の記述のうち、他に比較する資料がなかった部分については、『書附』の記述によって初めて意匠が明らかになった。

ただし、『書附』は本丸御殿内の主要な建物の位置を覚えるために、障壁画に描かれている物や欄間彫物・釘隠に彫られている特徴的な物を記したもので、障壁画等の画題を記した文書とは性格が異なる。

また、『書附』の大広間に関する記述により、釘隠が「牡丹つつみ花（牡丹の花熨斗）」であることが分かった。今回明らかになった釘隠については、これまで意匠名すら明確になっていなかった部分であり、『書附』の記述は貴重である。

幕府の御用絵師であった狩野晴川院が、文化 7 年（1810）～弘化 3 年（1846）までの公的な仕事の内容を記した『公用日記』¹³の中には、万治度、弘化度本丸御殿の障壁画の画題が記されている。

今後は、さらに『書附』の記録と『公用日記』等の文書類や、幕末の弘化度、万延度本丸御殿の障壁画の画題との比較をする予定である。

謝 辞

本研究にあたり、会田家文書『大切御書附』（埼玉県立文書館所蔵）の存在についてご教示くださり、あわせて同史料を翻刻していただきました東京都公文書館 西木浩一氏に、ここに記して厚く感謝申し上げます。

また、『大切御書附』の伝来経緯についてご教示いただきました埼玉県立文書館 白井哲哉氏、史料閲覧にあたり便宜を図っていただきました東京都立中央図書館特別文庫室にお礼申し上げます。

註

- 1 江戸城本丸御殿は、火災による焼失で 4 度再建された。建築史の分野では、それぞれ御殿が竣工した年の年号をとり「〇〇度本丸御殿」と呼ぶ。
- 2 江戸城本丸御殿の室内意匠に関する主な先行研究
松本 寛「資料紹介 御本丸御座敷御廊下絵様之覚（仙台博物館蔵）」、『東京都美術館紀要 No. 10』, 1986, pp. 29-30
東京国立博物館（編）『調査報告書江戸城本丸等障壁画絵様』, 1988
武田恒夫「V 協業 第三章 江戸城障壁画」『狩野派絵画史』, 吉川弘文館, 1995, pp. 357-382
伊東龍一「江戸城本丸御殿大広間における欄間意匠の変遷」『城郭・侍屋敷古図集成 江戸城 I（城郭）』, 至文堂, 1992, pp. 302-308
- 3 東京都公文書館 西木 浩一氏のご教示による。
- 4 「第二章 幕藩体制の確立 三 諸藩の鷹場設定」『新編埼玉県史 通史編 3 近世 1』, 埼玉県, 1988, pp. 389-394
- 5 東京都公文書館 西木 浩一氏のご教示による。
- 6 本稿「1. はじめに」参照
- 7 尾張徳川黎明会『徳川禮典録』, 1942 所収
- 8 仙台市博物館蔵
- 9 東京都立中央図書館特別文庫室蔵 請求番号 616-37
- 10 尾張徳川黎明会『徳川禮典録』, 1942 附図
- 11 平井 聖「数寄屋風の書院」『図説日本住宅の歴史』, 学芸出版社, 1980, p. 61
- 12 東京都立中央図書館特別文庫蔵 木子文庫所収
『江戸城本丸大奥ほか銅物絵図表紙共 35 枚の 1~35』
- 13 東京国立博物館（編）『調査報告書江戸城本丸等障壁画絵様』, 1988